ライトレッド、**オルトラマリン**を混ぜて一刷したらん様、四五の舶艇は、銀灰色を成せる海水との對照的に、雪白色（シュヒーワイス）の帆を觀ぜしも、嗚呼此一大展畫！――よしや、其處に小刀細工的何等の奇景あらずとも。

岬頭は、峨々峻劔たる巖石の絶崖、屹然、屏風の如く直下數丈足怖慄す、四ツン匐ひして可成降下し、岩傳ひに凹みの箇處を幸ひ、裾然。

脚下は波浪の打寄せ打退きある刹那、青色系、色彩の極美を發揮しつゝあり、**ヲルトラマリン**、**インヂゴ**、**エメラードグリーン**、**フーカースグリーン**、**コバルト**の或は單獨、或は混色に。

北面すれば、足跡印せし梶浦、安東浦、崎浦、美なる大島等指顧の間に集り、凉風そゞろに吹き來りて四方の熱氣を一掃す、快絶壯絶、到底凡筆のベミュライベンし得べきにあらず。

軈て此仙境に別れを告げ、彼の石佛の近隣にて、東尋坊との告別とて、荷物飲料の悉皆を飲み乾しき、三國港は間もあらず、路側兩傍に、海水浴舍の看板戸毎なり、重き勞足を引摺りつゝ、六時頃葦原の宿へとは歸舍しにき。（完）

大坂松原天彩畫塾新年會

天彩畫塾新年會は例年の通り十三日夜、先生の宅で催された。集まる者二十餘人、それに仲居さんが二人加はつて居た。

餘興。第一には高木君の琵琶とあり、悲壯の感に打たれたとでも言ふのか皆六ヶ敷しい顏して聞いて居た。次は先生の假裝。ツケヒゲの紳士がシルクハットに紋附といふ御英姿。誰やらが『田舍の名譽職』と言ふ。

玩具の太鼓が鳴り出す、三味線と一所にカナダラヒをたゝく、まるで天神祭だ。それから村田、平石君の本式の劍舞が始まる。

長谷川君は**ハナシ**（コワイロ）だ、流暢で少しも淀まないところ秀逸だらう。十川君が假聲を、おやりなさる。芝居を見ない人には分らないけれど巧いのだらう。安達、高橋、橋本君の二〇加は、笑はずんばあるべからざるもので大喝采。榎谷君の英語の唱歌は唐人臭い毛色の變つたもの。鷲尾君は變裝印度人。

これで一寸餘興をやる人が無くなる。併し、興は盡きないと見えて今度は、跳り出した。A君は顏に白粉塗つて**カヅラ**を冠つて鉢卷して御座る。四五人は機械的に手をたゝいて、歌をうたつて居る。活動寫眞的に跳る人もある。中々の盛會だつた。

十二時前になつたときK君が、君が代をうたつて散會しやうと言つたら、賴りない聲で、歌ひ出した。こつちでキミガアと言ふてるかと思ふと、あつちでサザレーイシノーとやつて居る。

（十三日夜　OW生）

■『小豆島十人寫生紀行』は二月中には必ず發行に相なるべく、會友並びに讀者諸君には割引の約あり、詳しくは三月號に廣告可致候間御含みまで。